

復活節特別集会

キリストの復活の秘義

2003年4月13日（東京 新宿）

奥田 昌道

今も生きて働いている霊的実在者 「罪と死」という問題 隠れたる神 イエスの立場に自分を置いてみて わが受くべきバプテスマ 永遠の現在 サタンが操ってやらせている 「第一のアダム」と「第二のアダム」 もしイエスがエゴイストだったら 死によって閉ざされている世界 新しい天命に生きる 祈り

●今も生きて働いている霊的実在者

暦の上での復活節は、来週の4月20日なんですけれども、一週間繰り上げて、本日、新宿集会では復活節をそなえていただきました。私はこの集会はとても大事な集会だと思っています。見渡してみますと、ここに集われた方々は本当に、大げさに言えば、キリストに生命を捧げるという気持ちで来られたと思います。キリストに生命を捧げる方にこそ、キリストはご自分の生命を豊かに宿らせ、芽生えさせ、新しく本当のキリストの姿に我々を変えていくてくださる。キリストの恵みというのは、無条件絶対の恵みですけれども、これをいい加減な気持ちで受けとる人には、これは勿体^{もったい}なさすぎるんです。

「豚に真珠を投げるな」

というひどい言葉がありますけれども、私はちつともひどいとは思わない。もちろん、「豚」には気の毒ですけども、「全くその価値のわからない者」というふうに受けとっていただいていい。あまりにも大事なものが、全くわからない人の所に差し出されて、踏みじられて、けとばされて捨てられるという。これはそれを大事にする人間から見ましたら、堪えられないことです。いや本当にそうなんですよ、堪えられないことです。そのくらいこれは尊い宝物なんです。イエス・キリストのご復活を中心としたキリストの生涯、これは本当に私たちにとっては宝物です。ところが、この宝物であるキリスト、主さまのご生涯というものは非常に隠されたものなんです。

さきほど、イラクの戦争の話とか、自分たちの日々の関心がどうしてもそっちへ向かうとかいうお話がありました。敗戦を経た日本の当時を生きた人間としては、誠に無理からぬ止むを得ないところだと思えますけれども。私は、それに囚^{とら}われることに対しては「ノー」と言います。「キリストに囚^{とら}われてほしい」と言いたい。

「だからこそ、キリストに囚^{とら}われてほしい」

と、私は申し上げたいんです。残酷な言い方かもしれないけれども。キリストを知らない



方は、「平和運動」ということで一生懸命やります。けれども、我々、キリストにしがみついている人間にとつては、それを乗り越えて、本当にこのキリストが全世界にしみ込んでくださらなければ、現象的に戦争が起きたり終つたりしても、それは本当の解決ではないということです。我々はああいうことが起こらないことを願わない者はない。願わない者はないけれども、現に起こってしまう。そうでしょ。

我々は一体どこに目をつけているのかということを、私は本当に狂える如くに思う。我々はイエス・キリストから目を離したら、とんでもない所へ行ってしまうということです。私たちは寝ても醒めてもイエス・キリストです。その方の中に生き、その方と共に生き、その方と運命共同体である。その中から祈り、叫び、振舞うという、その原点がなくなつたら、それは的外れ^{まことはず}になってしまふ。キリストはちつとも喜ばれないと思います。それだつたら、この世の人と全く変わらないですから。私はそのくらいにキリストにいわば夢中になっていますし、またなりたいし、そのために人に棄てられても厭^{いと}わない。

キリストは人に棄てられた。彼らは善を願っている人たちだつた。パリサイ人^{びと}たちも当時のイスラエルもみな自分は神に選ばれた選民だと自負して、自分たちこそ神のオーソドックス（orthodox 正統派、正統的）な、神の国の後継者と自負していた。そして、あのイエス・キリストという、けしからん、伝統を破壊し、自分たちの先祖以来の言い伝えを破壊し、

「己を神の子と称し、イスラエルの宗教を破壊する、あの者を殺せ！」

と言って、本当に熱中した。民衆も巻き込まれて、声を一つにして、

「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ！」

と叫んだのは決して宗教家たちだけではありません。民衆も全部です。あの救いを受けた、恵みを受けた民衆たちがこぞつて、

「イエスを十字架につけろ、バラバをゆるせ！」

と言つてきかなかった。イエスはただ独り十字架につかれた。弟子たちも逃げてしまった。そういう現実というものを、私たちはただ歴史的な二千年前にイスラエルの地であんなことが起こつた——当時、新聞があつたら新聞記事に載つたりして、すぐ忘れ去られてしまふ——そんな出来事なのか。それとも、現に今、我々に迫つてきている霊的な現実なのか。今も我々に食い込んでくる根源現実を受けとつていなければならぬ、復活節を迎えている意味は全くありません。

ところが、肉なる我々の思いというのは、追憶の彼方にすべてを流し去ろうとする。私たち人間というものを考えてみてください。もし、イエスさまがいらずしやらなかったら、私たちはどうでしょうか。すべて死をもつてその人生は終り、

「その人の生涯は棺^{かん}に蓋^{ふた}をするまではわからない」（棺を蓋^{おお}いて事定まる）

とよく言います。死ぬことによつてその人の人生は完結する。そして、その死んだ人の生まれてから亡くなられるまでの生涯をずっと辿^{たど}つて、



「この人の生はこういうものだった」

というふうに完結的なものとして見て、そしてそれを追憶し、

「ああ、あの方のように生きたい」

という追憶の対象ではあっても、

「今、現に生きて働きたもう」

という、そういうものとしては、我々は受けとれないですよ。

キリストを知らない方、そういう方々は愛する者と別れた時、愛する者を天に送った時、すべて追憶の中に生きようとしています。それを思い出させる数々の品々や遺品——それも別れが辛い時にはそれも葬ります——けれども、その人が愛しくて、その人をいつまでも覚えていたい時には、その遺品をいくつも大事にして、アルバムを開きその人の声を聞き、そして時にはお墓に行き、その人を偲びます。けれども、その方の中でその人が本当に、

「今も生きて働いてくれている霊的実在者、存在として受けとれるか」

と。これはその人その人の受けとり方次第だと思う。抛り所がない。そう思いたい。

「いや、彼は私の中に生きている。私の胸の中にいつまでも生き続けている。別れてのち、いよいよ新ただ」

とか思いますが、それは本当に根拠のあるものなのかなと言われたら、誰もわからない。

●「罪と死」という問題

それを本当に根拠あるものだと言って、ドーンと後押ししてくださる方は正に甦ってくださったキリスト・イエスそのお方ですね。そのお方と本当に我々が一つであるときに、そういう向こうの実在界、それが私たちの中に切り込んできて、私の中に拠点をつくって、そこで向こうの世界と今の私の現実とが一つになって生きていける。これは主さまから目を離れたら、もうダメです。主さまとの太いパイプがあつてこそ、私たちは日々新たにこの永遠の生命の中に活かされているということが実感できるんです。

もし、一年も聖書から離れてごらんない。一年も新聞ばかり読んで暮らしてごらんない。そうしたらもうそれは遠い彼方に消えてしまいます。我々の肉というものはそういうものです。肉なる人間、生まれながらの人間というのは、肉体を持ち、心を持ち、頭脳の働きを持ち、いろんな様々なことができる素晴らしい存在ですけれども、それはどこまでも「閉ざされた世界」の中でしか生きられない。これをキリストは「肉」と仰った。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。神の国を受けることあたわず」

と仰った。「人新たに生まれずば」と言われて、

「どうやって、そんなことができますか!？」

と、ニコデモは驚いた。人は「オギャー」と生まれて、生長して、そしてやがて枯れ木の



ごとく枯れて、死んで葬られて土にかえる。

「土からとられたから、そして土にかえる」

という、これが人の辿る生涯ですね、閉ざされた生涯です。始めがあれば必ず終りがある。人が「オギャー」と生まれてきたということは、墓場に向かって歩んでいる。その15、16歳位まではピークですね、20歳位までは上り坂です。けれども、やがて肉体も下り坂に向かう。そして我々の思いも、どうしてもその「死」というものの壁を破れない。それから、我々のうちの「罪」という、この得体の知れないものの力に勝てない。

「罪」の問題を全く考えない方は幸せだと思っんですよ。その人は肉体のことだけを考えていたらいいんだから。何が美味しいか、どこにどんな面白いものがあるか、そういうものだけを追いかけて生きている人は、私は

「気楽で幸せな人だな」

と、ある意味では思います。しかし、その人が今度ヨボヨボになった時にどうなるんでしょうか。己のことだけを求めて生きた人はどうなるのでしょうか。それは保証の限りではありません。

「結局、つまらなかった。すべては過去だ。今はつまらない。体もいうことがきかない。ヨボヨボだ。自分の愛するものはみな死んでしまった。誰も自分のことを構ってくれない。当たり前だ、私は人のことを構わないで生きてきたから、自分のことだけを求めてきたんだから」

ということになりそうですね。ま、そんな極端な人はいらつしやらないでしょうけれども。我々、人間存在というものは単に生物学的な人間として、生命あるものとして生きるだけでなくて、幸か不幸か、その良心というものは、善と悪というものを自分で判断する。善を欲し、悪を退けるというものが心にしみ込んでいる。ところが、

「欲する善はこれを為さず、欲せざる悪これを為す」

という悩みをかかえてしまっている。聖書の中では特にローマ書なんかがそうです。この「罪と死」という問題をローマ書は真つ正面から取り上げて、モーセ以来の律法を満たすことによつて罪を乗り越える。そして死を乗り越える。永遠の生命に生きる。律法による義の道、これが旧約聖書の道だった。それはモデルとして示されたけれども、到底、到達することのできない描かれた理想界に過ぎなかった。それは自分たちの惨めさを証明するのみと。その嘆きがローマ書の特に7章なんかピークに達している。

「噫、われ悩める人なるかな。この罪の力、死の力から私を解放してくれるのは誰か？」

と言つて、パウロは叫んでいます。彼はとりわけ罪の問題に対して敏感で、

「私は律法の義につきては責むべきところなし」

というふうと言つたほどの、律法を全うしようと思つて奮闘した。ところが、自分はます



ます奮闘すればするほどそこから遠いということ、人に冷たいということ、人を審くということ、ステパノのような愛の心がないということ。その分裂にあのサウロ〔後のパウロ〕はとても苦しかったと思うんですね。とうとう、ステパノが石打ちにされる時に、それをよしとした。ステパノが輝いて殉教していったあと、狂えるごとくに彼はキリスト教徒迫害の急先鋒でした。そしてあのダマスコ途上で復活のキリストにやられた。白昼の光となって現れたキリストに、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか!」

と、ぶつ倒されて、三日間、目が見えずものが言えず——まるでヨナがクジラの中にいたような——暗闇の中を三日間過ごし、そしてアナニヤの^{あんしゅ}按手を通して新たに生まれ変わったんですね。

「人新たに生まれずば……」

ということをパウロは現実体験させられて、そしてアラビヤの野で深く祈った。十字架というものがわかった。自分たちが十字架につけたキリストは、実は私たちの罪と死を全部背負って、十字架に懸かってくださったんだと。

●隠れたる神

これは単なる出来事ではなかった。出来事としては、新聞記事に載るような、ナザレのイエスという方がこういうプロセスを経て、あのような無惨な死をとげて墓に葬られた。そこまでは新聞記事に出ます。けれどもそれ以後の、復活以後は新聞記事にのりません。何の証拠もないからです。

「人はこんなことを言い伝えている」

というだけなんです。さっきのマタイ伝でもそうでしょ。ああいうことが書かれているだけであって、誰も証明できるような形でイエス・キリストの復活の姿に出会った者はいない。

「いや、私は見た!」

と言っても、それはその人が見たのであって、他の人は見ていない。エマオ途上で旅人の姿をしたイエスさまに出会って、あのエマオの夕、食事の時にパンを裂かれる姿を見て、

「あつ、イエスさまだ!」

と思った時に、その方はパッと姿が消えた。そして、急いでエルサレムに帰ってみたら、またイエスはそこに居られたという。これはもう新聞記事に載るような、写真で証拠を固めるような次元ではない。だから、聖書学者とかいう方々は、

「それは弟子の心の中に浮かんだ幻だろう、幻影だろう。あまりにも先生を慕う心

がそういう幻を生み出したのだろう」

とか言う。よくありますね、何か向こうの海の上に流水の像が映るとか〔蜃気楼〕、そういうようながありますよね。そういう何か、



「あまりにも追憶が強いために、慕う心が強いために、そういう幻の姿となつて先生が現れた。そしてすぐ消えた。そういうことは医学的にもあるそうだし」

とか言つて、キリストが聖書に書かれているように、ああいう姿で現れたということは科学的、学問的には証明不可能な事実なんです。

だから素晴らしいんです。およそ神さまの次元の世界のものは、科学的な証明などで証明できるものではない。そんな安っぽいものではない。私たちの閉ざされた世界、この三次元の世界で、私たちは肉体をもつてこの素晴らしい地球を生きている。太陽の恵みで生きている。そういった次元を超えた次元から、別空間から、天界という別次元から切り込んで来てくださったのが、ナザレのイエス・キリストという霊的人格なんです。それがあのクリスマスから始まつて、そして30年のご生涯を経て、最後に十字架につかれるというところで終るわけです。

人が見たのは、馬槽うまぶねの中で「オギャー」と泣いているイエスさまです。12歳の時に何か大人の学者たちと問答しているイエスさま。その他もろもろの姿、伝道されてからの3年間のイエスさまのお姿。これは肉の眼で見えています。けれども、それは肉の眼で見ているけれども、本質を見ているかどうか。そこに隠されているイエスさまの本当の姿を見ているかどうか。これはおそらく見ていないと思う。

出来事としての肉眼で確かめるものはみんな見えますよね。けれどもそれは、それがイエスさまではないんです。イエスさまの本当の姿というものはどこまでも隠されている。

「隠れたる神」

なんですね、イエスさまご自身が。隠れたる神です。

イエスさまというのは、本当に私は不思議なお方だと思います。皆さん、人ごととは思わないで、自分がナザレのイエスという運命を担った人間としてこの世に現れたというふうに考えてごらん下さい。いや、そのように本当に自分の問題として受けとつてこそ、聖書は自分と一つになる。単なる歴史的記述だったら、これはもう、興味のある人が読み、興味のない者は読まなくていい書物なんです。そうじゃなくて、今、自分の中にどうやってその永遠界と自分とがつながるかということ。聖書の記述はみなそうです。

「今、あなたのことが語られている。一対一だぞ。あなたの中に切り込んできている。

それをあなたは受けとるか？」

と、こうやつて迫っている。いい加減な気持ちで読めないんです、これは本当のところ。

●イエスの立場に自分を置いてみて

それで、イエスさまの立場に自分を置いてみてごらん下さい。馬槽に寝ていたイエス。あれはイエスさまは全然自覚はありませんね。大人たちが、

「お前は馬槽に寝ていたんだよ」



と言う。ものごとについて誰でも、

「自分というものはどんな生まれ方をしたのだろう、自分の両親は誰だろうか？」

と、みんな気になりますよね。そうでしょ、ルーツを探ろうとする。

「お父さん、僕はどんな生まれ方をしたの？」

「うん、お前はベツレヘムで馬槽の中で生まれた。気の毒だったよ、実に」

「あ、そうなんですか……。お母さん、私はどんな生まれ方をしたの？ 私のお父

さんは本当にヨセフなの？」

「それは言えないね」

と、お母さんは黙らなければならない。そうでしょ。まさか、お母さんが、

「いやあ、突然、天使が現れて、こんなことがあつたんだよ……」

と、マリヤさんはイエスに話して聞かしたのだろうか。話して聞かせたら、イエスはどんな反応を示しただろう。もし本当に話して聞かせておられたら、

「ああ、やつぱりそうだったの」

と、イエスさまが答えたかもしれない。私はそう答えられたと思う。少年イエスの不思議ないろんな姿を見えますと、もし本当にマリヤさんがそういうことを語られたとしたら、

「そうなの……。うん、それはありうることね」

とか、そう答えたと思うんです。

「そしたら、ヨセフは何なの？」

「育ての親だよ、肉の親ではないよ」

「そうなの。それでは、僕の肉の親は？」

「あなたの肉の親はいないんだよ。あなたの本当の父は天界にいらつしやる」

「うん……」

と。どんな問答をされたかわかりませんよ。わかりませんが、私はもし少年イエスだったら、そんなことをきつといういろいろ思うと思います。誰かが、

「お前はちつともお父さんのヨセフに似てないじゃないか。本当にお前はヨセフを

お父さんと思っているの？」

とか言うでしょうね。そしたら、

「お母さん、人がこんなことを言っているけど、どうなの？」

とか。これは私の想像の世界ですけども、私はやはりイエスさまというお方は本当に一方では徹底的に人間なんですよ。それでいながら、天から生まれたお方でしょ。かつて父と共に栄光の中にいらつしやったお方が聖旨^{みむね}に従って地上に降りて来られたわけでしょう。そのことに、ある時気づかれる。伝道に出られてからも、絶えず気づかれる。そして、

「イザヤ書に書いてあるのは、これは私のことを言っている。あそこに書いてあるのは私のことを言っている」



と、全部、自分に引き寄せている。詩篇のいろんな所とか、預言者のいろんな所とかも全部、自分に引き寄せて、

「ああ、これは私のことを預言している」

と。そういうふうにして、自分というものが何者か——よく言われている「アイデンティティー」[identity 他とは異なる正にそのものである自己同一性]ですね——それを絶えず神さまとの関わりの中でしっかりと捉えておられたのに違いないと、私は思っています。

そんなことを軽々しく人には仰らない。それがエマオの途上で弟子たちに、旧約聖書からずうつと説き起こして、

「イエスはこのようにして必ず苦しみを受け、そして甦るべきではなかったのか」と言われた。

●わが受くべきバプテスマ

イエスさまは、伝道のある時から自分が十字架にかかるということを漏らし始めました。

「これは他の人に言ってはだめだ。誰にも言ってはだめだよ」

と言いながら、選ばれた弟子には自分の奥義を語られました。ところがペテロなんかは、

「そんなことがあつてはなりません！」

と、むしろ否定してかかります。しかも聞いた時は、「ああそうか」と思っても、すぐ忘れてしまう。イエスが復活された時、女たちが墓場に行ったらイエスさまは見えなかった。

「天使たちがいて、こんなことを語り告げた」

と言って、弟子に伝えたら、

「たわごとだと思いついて、信ぜざりき」

と、ルカ伝24章の所に書いてますよ。あの十二弟子たち——ユダを除きまして残された十一弟子たち——も、イエスが甦えられたということを誰も信じなかったと書いてある。そのくらい、我々の肉なる思い、肉なる姿というのは、天界の霊界に属する真理というものと遠いんです。一時的に「ああわかったよ」と思ってもすぐ消えてしまう。そして、旧い肉の中に舞い戻ってしまう。それを、

「それではダメだよ、絶えずあなたは御国を思いなさい。キリストをいつも思つて

いなさい。キリストといつも一つでありなさい」

と言つて、私たちの中に、あなたの中に切り込んで来てくださるのが聖霊というお方なんです。聖霊というお方があなた方一人ひとりの中にお宿りくださって初めて、天界とあなたとが本当に太い絆で結ばれる。だから、小池先生が

「聖霊、聖霊、聖霊」

とあんなに仰る。しかも、聖霊はどうやってあなたの中に宿つてくださるか。これは聖霊がだから宿つてくださるんですけれども、聖旨だからすぐ宿れるなら、イエスさまは十字架



にかかる必要はなかった。イエスさまが3年間、弟子たちと一緒にいて天国のことを語り、父の神さまのことを語り、いろんな不思議な業^{わざ}をなさり、

「これは徴^{しるし}だよ、徴に囚われないで、本当の奥義をつかまえるんだよ」

と、いくらお語りになっても、弟子たちはそれを信じなかった。弟子たちが本当の奥義をつかめるようになったのは、ペンテコステ以降なんです。ペンテコステで聖霊^{きんぐだ}が降った。

「この火既に燃えたらんには、われ何をか望まん。しかし、それまでに私が受けるべき血のバプテスマがある。十字架という血のバプテスマを受けなければ始まらない」

と言って、イエスは悩まれた。

「思い迫ることいかばかりであるか。我には受くべきバプテスマあり」

と。それがあの十字架です。四つの福音書が語り伝えていますあの十字架の血のバプテスマをキリストは受けてくださった。

「どうぞ、彼らを赦してやってください」

と、七つの言葉を語って、そして、

「わがこと終りぬ。わが霊^みを御手にゆだねます」

と言って、息絶えられた。その出来事を通して本当に、

「聖所の幕がまっ二つに裂けた」

という。「聖所の幕」というのは、この世と神さまの天界、神さまとの間を隔てている幕なんです。年に一回、大祭司が血を携えて、ただ一人その幕の奥に行けた。そして、自分に血を注ぎ、民に血を注ぎ、そこで贖いをやっていた。それはシンボル（symbol 象徴）に過ぎない。動物の血が我々の罪を潔めるはずがない。我々の死を生命に転換するような力を持つはずがない。けれども、シンボルとして毎年一回やっていた。ただ一回、大祭司が入って行けるだけで、普通の人は入って行けない。ところが、十字架のあの瞬間に、聖所の幕が二つに裂けて、隔ての物がなくなつたという。天からこの地界への道が開けた。

「我は道なり」

と仰ったその道がここに通じたんです。

「私は道だ、真理^{まこと}だ、生命^{いのち}だ」

と仰ったその本質がご復活という姿で現れたんです。あれはキリストの隠されていた、イエスさまの中に隠されていた本質^{あら}が露わな姿で現れてきた。あの十字架という血のバプテスマがあつて初めてイエスさまの本質が露わな姿で現れたのが復活のイエスさまなんです。あれが本当のお姿です。それまでのお姿は仮のお姿で、隠されたお姿なんです。肉体をま^まとっておられるがゆえに、弟子たちには、人々には肉体のイエスさまは見えます。けれども、イエスさまの本質は隠されている。

「汝らは見れども見ず、聞けども聞かず」



と、隠されていたんです。それが十字架を通過して、贖い業を終えて、神の御力によって、聖霊の御力によって、霊体という本当のお姿で現れられた。

あれは肉体までも変貌したんです。私は、イエスさまのお体は墓に残ったままで、霊体となつてイエスさまが現れてくださったとしても、まことにそれでもいいと思うんですけれども。もう肉体までが変貌して、死体が見つからないというんでしょう。だから、肉なる体までも霊化された。そして、本然のお姿がああいう復活と呼んでいる姿で、栄化されたお姿で現れた。これはかつて父と共に持つておられた栄光のお姿があの時現れたんですね。だから、弟子たちはそれを見て喜んだけれども、それは弟子たちの目が開かれたから見えたんです。喜んだけれども、それはまだ現象として見ていただけですから、本当に内側に永遠の御姿として宿るにはペンテコステが必要だったわけです。

●永遠の現在

歴史的にはそういう順序でこのドラマが展開していきました。その展開していったドラマを過去のドラマにしているわけではない。過去のドラマなら、歴史と共に消えていきます。日々に新たな出来事が起こりますから、新聞記事に五段抜きで書かれたものも全部かなたに追いやられてしまう。けれども、あそこで起こったドラマは神さまのドラマですから、我々の中に切り込んできて、

「これは永遠だ。この世のものは過ぎ去っていく。しかし、私という存在、私というものが語った言葉、これは過ぎ行くことなし」

とそう言つて、我々に迫ってきてくださっている。そういうふうにはイエスさまを受けとらなければ、本当に受けとったことにならない。復活の主に出会ったことにならない。

そして、復活の主は天にのぼられた。四十日の間、弟子たちに度々現れて、御言を語り、それから天にのぼられた。そして、

「お前たち、祈っておれ」

と。十日間祈っていた時に、あの火の如きバプテスマが起こりました。聖霊のバプテスマです。これを今、私たちには瞬時に起こしてくださるんです。

あれは歴史的な出来事のような時間的順序をもつて、イエスさまがお生まれになり、地上を歩み、十字架におかかになり、ご復活され、40日間地上におられ、そして天界にのぼられて、十日後に聖霊となつて降^{くだ}つてこられたというプロセス。これが今度は、私たちにとりましては、永遠の霊界の、永遠の現実として、根源現実として常に新たに、日々に新たに迫ってくるんです。過去の出来事ではなくて、現在の出来事として迫ってくる。

そして、将来に私たちは神の国を受け継ぎます。新天新地が形成されます。その時の我々の姿も今、現在の中に迫ってくる。だから、現在というものは常に「永遠の現在」なんです。永遠の現在、それは聖霊がそれを我々に自覚せしめてくださる。その聖霊がどうやって私



たちに宿ってくださるかという、十字架で土台を築いた。

「十字架で道を開いた。十字架は過去の出来事ではない。あなたを贖い、あなたの中に聖霊という姿で私が宿るために、私は十字架にかかった。あなたはこれを受けとるか」

と、こう言って迫ってください。

「あなたは受けとるか。十字架は汝のためなり。私はあなたを愛した。その愛を具体的に表した。それが十字架の血のバプテスマだ。あそこでああなたは葬られた。あそこでああなたは死んでいる。もうあなたは生きていない。私の甦りと共にあなたは新しく甦った。あの十字架でああなたは死んだ。それを今、受けとってごらん。あなたの根源現実としてそれを今、しっかりと受けとってごらん。気づいたその瞬間に、私は聖霊という姿でもってあなたの中に宿っているよ」

と。十字架と聖霊は即なんです。イエスさまという存在もそうです。小池先生はよく、「イエスさまは無者だ。^{むしや}イエスさまは神さまの前に自分を空っぽにして、投げ出している無者だ」

と仰った。空っぽで、神さまの前にすべてを明け渡しているその無者——無即、無限無量者という——無者になつて数時間後に神さまが入って来られたのではない。無者の姿に徹せられたその時に神さまは充滿してしまつたんです。

「幸いなるかな、霊の貧しき汝よ」

と仰っているけれど、その前にキリストご自身が霊貧しく^{から}空っぽだった。

「瞬時に聖霊という天国が私の中に宿った」

と。これは具体的にはヨルダンでバプテスマをお受けになつた時に、

「水からあがられたら、霊界の天が開けて、聖霊が鳩の如く形をなしてイエスの中に宿った」

という歴史的な出来事がありました。それからのイエスさまは祈ればいつも、祈っていらつしやるということは神さまに明け渡しておられるという姿ですね。

「あなたの御意を成してください。^{みこころ}あなたの御意をお示してください」

と言って、肉体のイエスさまは、我々と同じ姿のイエスさまは、霊の次元では常に神さまの前に自分を空っぽにして、

「父よ、汝の御意を。私は僕です^{しもべ}」

と言つて投げ出しておられた。その時に、ゼロなるイエスさまに無限無量なる神さまが宿つておられた。全智全能なる神さまが宿つておられた。だから、片っ端から御業が展開しました。無即無限無量だった。永遠の生命が宿っていた。そのイエスさまの中に宿っていた永遠の生命すらも、キリストは十字架に付けてくださった。私たちと一緒に十字架にかかつてくださったんです。独りでかかつてくださったけれども、



「その時にあなたたちを抱きしめて一緒に十字架にかかった。あそこあなたは葬られている、死んでいるよ」

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず」

という。「水の洗礼」というものを教会の方々はみなお受けになりました。これはシンボル(象徴)です。何のシンボルか。イエス・キリストの死に合わせられるバプテスマです。それは生命に甦えらんためなんです。キリストが復活された時に私たちも、死に合わせられた私たちは生命にも合わせられる。

●サタンが操ってやらせている

ローマ書6章の所にそのことがハッキリとうたわれています。

「³なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命^{いのち}に歩まんためなり。」

(ロマ6・3〜4)

「新しき生命」とは復活の生命、イエスキリストのあの栄光体です。あの姿に歩まんためなりと。「死に合わせられる」ということはまだ前半、半分です。本当の目的は、

「新しい生命に活かされる」

という、こつちが本体です。これが目的なんです。この本体が成就するためには、どうしても通らねばならない死というものがある。それは私たちが自分で死ぬのではなくて、イエスキリストが代わりに死んでくださって、

「そこであなたも死んでいるよ」

という。これが恵みなんです。私たちがいくら自分で自分を殺しても、肉体を殺しても、それで甦られることはありません。自殺はダメです。自殺したら甦られるか、ダメです。自分で自分を死に追いやってもダメです。それはイエスキリストだけが、

「もうあそこあなたは死んだ。あなたは自分が辛かろう、自分が嫌だろう。気持ちちはわかる。でもあなたが死んで何になるか、陰府^{よみ}に下って何になるか。サタンに負けるな。私は十字架でサタンに勝った。あそこあなたも一緒に死んだよ」

と。この私たちが生きている現実というのは、見えないだけであって、神さまからの光、神さまの聖霊の力と、サタンという陰府の力とが闘っているんです。人は、

「ああそうだよ。神さまの力は、神さまは愛しておられるから、我々に力を下さっている。神さまは絶えず働きかけて、私たちを守ってくださっているよ」

ということは受けとるんです、クリスチャンは。けれども、サタンの力がどんなに今、狂おしくこの地上を惑わしているかということに思いを致さないから、判断を誤る。サタン



は侮^{あなど}るべからず。戦争を起こし、クリスチャンを使つて爆撃を行わしめ、それをやっている人は真剣に、「正しいことをやっている」と思つてやっているけれども、誰も止められない。全部、サタンが操つてやらせている。我々がいくら「平和運動だの、何々運動だの」といつてやりましても、サタンは喜んでいるんですよ、「やらせろ、やらせろ」と。そういう次元を突き抜けた所から本当に聖霊の力に乗つかつて、

「人々の心に聖霊を！」

と、これが本当の平和運動です。キリストの人格に化せられていく、霊的人格に化せられていく。これしか望みはない。我々は百歳生きようと、千年生きようと、本当にキリストの聖霊の生命が宿らないこの地上というものは、偽りの楽園にすぎない。ヨボヨボの人間ばかりが千年生きていてどうしますか、文句ばかり言っている人間が、エゴイストの人間が。口では美しいことを言つても、結局はエゴイストなんです。自分ばかりが可愛^{かわい}い。自分によくしてくれる世の中は可愛^たいけれども、ちよつとでも非難されたらもう世の中は蹴飛ばす。そういうのが人間性なんです。その人間性を讃^{たた}えていたらダメなんです。口ではきれいなことを言つても、心は反対なんです。

もうそんなことは社会主義国、共産主義国の独裁者の国々の姿でわかりますでしょ。どんなに口でいいことを言つていても、一部の階級が特権を握つて、金の御殿に住んで、自分だけがいい思いをして、そして自分たちのことを悪口いう奴は即刻処刑して、百%支持をさせて、みんな恐いからものが言えない。恐怖の中に追い込んでいく。それがイスラムであるのか、共産主義であるのか、何であるのか、イデオロギーは何であれ、結局、人間のエゴというものを本当に解決していないイデオロギーはすべて行き着く所はそこなんです。それを操っているのはサタンなんです。人間は操られているだけです。

私にはそう思える。だから、我々は突き抜けた世界でこの世を見なければならぬ。突き抜けさせてくださるのが聖霊なんです。黙示録を読んでご覧なさい。恐ろしい世界が展開しています。黙示録は暗号に過ぎません。

「海の三分の一は血に染まる。三分の一の人間は死ぬ」

とか、実に恐ろしいことが次々と描かれています。あれは暗号なんです。暗号なんだけれども、それと質的に似たようなことが地上でますます起ころうとしていますでしょ。

生物化学兵器なんていうものによつてバイ菌がばらまかれたら、一体どうなると思いませんか。例えば京都だったら、琵琶湖が汚染されたら、もう我々京都も大阪も全部、琵琶湖の水で生きている者たちは生きて行けないことになる。海が汚染されたら、もうどうにもなりません。空気が汚染されたら、どうにもなりません。そんなことがその気になればできる状態が起こっているわけです、空中からサリンを散布したら。そういうものが起こらないようにということ、一生懸命に一方では防ごうとしている。しかし、他方ではそれを起こそうとしている。そういう物凄く人間を脅^{おびや}かす悪の霊力、これがサタンです。これ



が人々を操って、そういうことを起こさしめている。
 ですから、この地上の出来事というのは、その地上だけを見ていたのでは、とても判断できないと思う。私は地上のことを判断する面では無能力者であるとハッキリ言う。私にはわからん。それを判断できるほど私は賢くない。私はいよいよキリストに祈り込み、そして自分のできる所で、本当に自分の助けを求めている人に「善きサマリヤ人」となって、一緒にキリストの生命を生きる、それを分かち与える。そして、たとえ私の肉体がサリンによって朽ち果てても、私の霊体は朽ち果てない。

●「第一のアダム」と「第二のアダム」

「⁴²死人の復活もまた斯くのごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、⁴³卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ」(コリント前 15・42～43)

とコリント前書15章の復活の所に書いてありますでしょ。あなた方の播くものは何か。麦を播く。種は朽ちる。ところが、朽ちないものが出てきているではないかと。

「己を保たんと思う者はこれを失い、わが為、福音の為に己を棄ててかかる者は永遠の生命を得る」

とキリストは仰った。そして、キリストはそれを実践してくださった。キリストの十字架の死という尊い死によって、本当に天と地との間に太い道が開かれた。

「我なり、懼るな。心安かれ！」

というキリストは道となってくださった。道というのは私たちが踏みしめて行く道なんです。イスラエルの人たちが紅海を渡って行きましたね、自分の足で踏みしめて。おそれ多くも私たちは、キリストというお方を踏みしめて行けと、

「私の背中を踏んで行け」

と言って、キリストは道となってくださった。

「それを踏んで歩いているうちに、あなたもキリストの姿に化せられるよ。踏みしめて歩いて行く原動力は聖霊だ。それをあなたに与えた。あなたが十字架を本当に受けとったその瞬間に私は聖霊という姿であなたの中に宿った。マリヤさんの中に聖霊が宿って受胎が起こったように、あの十字架の死を受けとったあなたの中に、私の聖霊という生命が受肉して宿った。そして新しい生命に歩んで行くんだ。

これは見えないよ」

と。あのキリストのご復活の栄光のお姿は本当にキリストの本来の姿が現れたに過ぎません。だから、それに出会った弟子たちは幸せでした。いや本当なんです。あの山上で変貌された時、あの時も眩い姿になられた。あれもたった三人の弟子がそれを見ただけです。私たちにその見えないものを見せてくださるのが聖霊なんです。ヨハネ伝にあります、



「聖霊は私に栄光あらしめる」

と。ヨハネ伝の13章から17章までは、いかに主さまが別れにあたって、聖霊のことを仰つてくださっているか。

「真理の御霊をあなた方に与える。助主を与える。この方がすべての真理へとあなた方を導く。今まで私が語っておいたこと、それを全部甦らせる。そして、その本当の奥義をつかませる。これは聖霊だよ。あなたたちを決して孤児にして棄て去らない。私は行つて所を備えたら、必ず帰ってくる。そして、父と私はあなたの中に一緒に宿る。我らはあなたたちの中に住処を共にせん」と言つてくださっている。

さきほどのローマ書6章をもう少し読んでおきましょう。

「4……我らも新しき生命に歩まんためなり。5我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。

接ぎ木というのがありますね。この肉なる私たち「第一のアダム」が、「第二のアダム」でありたもうイエス・キリストの十字架の死に接ぎ木されると、私たちは彼と共に葬られ、そして、彼の復活の姿に化せられる。

5我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。6我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体ほろびて、

この罪の体、「第一のアダム」がほろびて、こののち罪とは無縁の新しい「第二の新生アダム」——それはキリストと同質です——そういう姿に生きんためなり。もうあそこで十字架でほろぼされた私たちは罪の力から解き放たれている。

此ののち罪に事えざらん為なるを。7そは死にし者は罪より脱るるなり。8我等もしキリストと共に死にしなければ、また彼とともに生きんことを信ず。9キリスト死人の中より甦えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。10その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につきて活き給えるなり。

神さまの中へと生きておられる、義の中に生きておられる。

11斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、過去の私たちの旧き我を「罪」というふうに表示します。それに対してはもう死んだ者、そこから解き放たれた者。そして神につきては、

神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし。」（ロマ

6・3～11）

神の中に生き給うたキリスト、神に対しては、キリストのお陰で、キリストにいだかれ、そして「活きたる者」、これがあなたの本質だという。肉における限りは、こんなことは受け



とれない。しかし、^{たすけぬし}助主、聖霊が来てくだされば、

「^{まことしか}誠に然り、アーメン。これが私でした。ああ、神の恵みは山よりも高く、海よりも深く広い」

ということを実感させてくださる。

ローマ書8章へ行きますと、我々は「肉と霊」の二つの姿で生きているという。生まれながらの「第一の亚当」は「肉」なる我、これは律法を全うできなかった。しかし、

「第二の亚当、これは霊なる私たち、これはもう天国直結だ。この霊なる姿の私たちでありさえすれば、あなた方は永遠の生命だ。旧き第一の亚当に舞い戻れば、それは死であるぞ」

と。この地上の生を生きている限りは二重人格です、我々は。二重性を持っている。この地上を宿としている限りは、「第一の亚当」に舞い戻ることも自由だし、キリストの「第二の亚当」の中に生き続けることも自由だし、それはあなたの選ぶところである。我々は旧きを棄てて新しきに生きる。

「誰でもキリストにあるならば、新しくせられたる者なり。旧き^{ふる}は過ぎ去った。視よ、一切は新しくなりたり」

と。絶えずその中に自分を向けていけないといけない。私たちはその努力をしなければいけない。絶えずキリストさまに向かうという努力をしなければいけない。永遠の生命そのものは努力では得られない。でも、

「永遠の生命を下さった」

というその現実に生きる努力はしなければいけないんですよ。わかりましたね。

朝ごとに、旧き自分に戻るのか、キリストの新しい所へ行くのかと、朝ごとに私たちは決めていかなければならないんですよ。

「朝食は、ミルクですか？ コヒーですか？ 何ですか？」

と、朝ごとに決めていかなければならない（笑）。だから、ヒルティも言っています、

「朝、目覚めた時に自分がどういう思いの中に生きるか。これが決定的に大事だ。朝、目覚めた時に過去の忌^いまわしい所へホイと思いが行ってしまうと、その一日はもう汚されてしまう。朝、目覚めた時に、神さまの中へスーツと入れたら、その一日は勝利だ。勝負は朝で決まるよ」

と、ヒルティは経験から言ってくれている。だから、「聖書を読まなくては」と無理に思わなくていい。「主さまー」と叫べばいい。

「主さま、ありがとうございます。主さま、あなたによって目覚めさせていただきました。夜ちよつと恐い夢を見たけれども、もう主さま、目覚めたらもうあなたの中です。もう旧きは過ぎ去りました。大丈夫です」

と言って、主さまにご挨拶しないといかん。我々は人さまには挨拶します、「おはようござい



います」と。先ずご挨拶するのはイエスさまにです。

「ありがとうございます、目覚めました。外は雨ですけども、あなたにあつたら晴です。ハレルヤー！」

とか言つて（笑）。晴れてたら、ますます「ハレルヤー！」とか言つてね、そうやってイエスさまにご挨拶して、イエスさまの中に生きていく。

「そうだよ、そうだよ。今日も一緒に行くんだ。力を与えるよ」

と。「主の祈り」がありますね。……

「私は無力です。あなたの御力で歩ましめてください。私は大それたことは望みません。私のすべきこと、「お前の今日やることはこれだよ」と仰つたことに私は全力投球いたします。どうぞ、それをやらせてください」

と言つて、ことごとくに主さまの導きのもとに歩いていく人生。それが新しく生まれた私たちの人生なんです。

●もしイエスがエゴイストだったら

旧き私たちは自分で計画し、自分の思いに従つて行動し、そして「成功した」と言つては喜び、「失敗した」と言つては嘆く、これが旧き私たちの歩みでした。「病氣になった」と言つては心配し、「治つた」と言つては喜び、そういう私たち。それが私たちの第一のアダムとしての私たちの営みなんです。多くの人はその営みの中に終始している。けれども、

「そういう営みの中に閉じこもつていては、あなたに永遠の生命はないよ」

と言つて、天国から、神さまの世界から急降下しておりてきて、道を開いて、

「ここに生きるんだよ！」

と言つて示してくださいだったのがイエスさまです。その他にどなたがこんな道を開いてくださったか。具体的にですよ、「具体」というのは体を具そなえてです。我々と同じ姿で、我々と同じ人生を歩みながら、しかし、それを乗り越えた次元を絶えず徴を通して示してくれた。

ラザロのあの復活の姿、あんなことは普通の人間にはできっこありませんでしょ。さつき死んだ人間ならまだ、霊が戻ってくれば生き返りますよ。四日経つて肉体が朽ち果てようとしているものを元の姿に戻すという、そんなことはできません。しかし、あのラザロの復活だつて、結局考えてみたら、元の姿に返っているだけで、永遠の生命ではないですよ。そうでしょ。ラザロの元の姿であつて、第一のアダムの姿にまだ留まっている。あれはシンボルなんです。

「キリスト・イエスにある者は永遠とこしえに死なず。我を信ずる者は死すとも生きん。

およそ生きて我を信ずる者は永遠に死なず。汝、これを信ずるか」

と迫られた。これは、

「あのラザロの復活以上の世界を与えるぞ」



という、そのいわば徴としてラザロを甦らされた。

「永遠の生命というものは、もつと凄いとんでもない、驚くようなことだ。驚くようなことしか神さまはなさらないよ」

と。そういう神さまの驚きの世界です。喜びの世界、生命溢れる世界。これを人間は憧れながら、実は諦めていた。憧れてはいたけれども諦めていた。それが本当に弟子たちの目の前に示された。すると弟子たちは、

「たわごとだと思いついて信ぜず」

と。こうでしょ。それで、パウロは言います、

「イエスが甦られなかったら、我々も甦ることができない。イエスさまがあのような姿で現れたということは決定的に大事だ。あれが起こっているから、我々も同じ姿に化せられるんだ」

とコリント前書で言っている。もし、イエスさまがエゴイストでね、

「私はもう天の父と一緒にいたい、もうこんな人間どもは放っておいて。しばらく地上で現れてしゃべったけれども、あいつらは全然聴きません。あんなやつらはもう棄てますよ。お父さん、私はあなたの所へ帰りたい。」

と言って、スーッと天へ飛んで行ったら、それで終りだったんです。

「本当に十字架を受けなければならぬんですか」

と。小池先生が作詞された召団讃美歌A5番「わがみ神よ」は素晴らしい讃美歌です。これは聖書の大奥義をつかまえた讃美歌ですよ。

「なぜイエスは十字架にかからねばならなかったのか。どうしてそれをイエスは受けたのか。そしてその贖い業を終えて、本当に霊体として栄光の姿で現れて、そして天に昇られて、聖霊を降し、世の終りまでイエスは働いておられる。私たちを通して働いてくださる」

という、そのイエス・キリストのことをあの讃美歌ですつと歌っている。

〔註：A5「わがみ神よ」（讃美歌320「主よみもとに」の曲で）

- 1 わがみ神よ十字架の この苦杯を取り去り み許にゆき父と共に とこしなえに在りたし。
- 2 されど我はみ父の み旨により十字架を 負いて往かんゴルゴダへと 我を棄てて従わん。
- 3 主の十字架のかたえに 悪しき者ら懸けらる 驕る心碎ける胸 これぞ人類の分かれ目。
- 4 主言い給う砕けの 胸の者に「汝は 我と共に今日この時 パラダイスに在るべし！」。
- 5 午後の三時天地は 雷鳴のため晦冥 いなずま飛び地震振えり 歴史を絶つ徴候ぞ。
- 6 十字架の主は叫べり エリエリレマサバクタニ 更につづく大音聲 聖所の幕は裂けたり。
- 7 主は十字架を荷いて あがないわざ果たして 甦りて現れたり マクダレナに最先に。
- 8 復活の主は昇りて 神の右に坐したり み約束のみ霊降だす 時を待ちて祈り給う。
- 9 聖霊は火か疾風か 祈る群に臨めり ペンテコステのバプテスマぞ！ エクレシヤは成りたり。」



それから、A6番「神を無みして」では、
 「人間どもよ、本当に目覚めろ。本当に根源に帰らなければ何をしても結局それは無駄に終る。根源のところへ帰れ。神を無みしていたらダメだ。そこへ帰れ」ということを歌っている。

〔註・A6「神を無みして」(讃美歌260B「千歳の岩」の曲で)

- 1 神を無みして万ずの事を いかに謀るも空の空なり ああ亡びゆく文明文化。
- 2 剣を執れば剣に亡ぶ 万ずの国は自滅への道 ああ人の世の罪ぞ果てなき。
- 3 世紀の終末近づきたれば 心を裂きて神に帰れよ！ 三次大戦いつかは知れず。
- 4 大和島根の人よ醒めよ 古来われらは道の民なり 今こそ受けよキリストの道。
- 5 預現者どもも主の使徒たちも 亡びゆく世に真理の道の 証しを立てて世を去りゆけり。
- 6 幼児どもに国境なし イデオロギーの限界を悟り 人間に帰りて手を握り合え。
- 7 人はもと霊止神仏なり 万象帰一物心一如 万ずの人よ相抱けよや。
- 8 歴史の終末明日に迫るも 主にこそ在りて人をば愛し 今日一日を千年と生きん。」

それで、私たちは、クリスマスであろうと、復活節であろうと、ペンテコステであろうと、いつも中心はイエス・キリストというお方へ帰っていきます。イエス・キリストこそは父の御意を体现して、我々の前に現れてくださり、そして、我々どうしようもないやつどもを愛して、十字架にかかつて、そしてあの栄光の姿で現れて、

「その栄光の姿にお前たちを化すまでは終らないぞ」

と言って、世の終りまで祈り続け、我々のうちに宿り続け、働いてくださる。素晴らしいお方ですよ。

●死によって閉ざされている世界

ルカ伝24章の所を見ます。

「一 週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。² 然るに石の既に墓より転し除けあるを見、³ 内に入りたるに、主イエスの屍体を⁴ 見ず、これが為に狼狽えおりに、視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。⁵ 女たち懼れて面を地に伏せたれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。⁶ 彼は此処に在さず、甦えり給えり。』」(ルカ24・1-6)

23章の終りの方では、イエスの屍をアリマタヤのヨセフが、議員で身分が高かったので、ピラトに願ひ出て、その屍を十字架からおろして葬ったということがあります。

「51……ユダヤの町なるアリマタヤの者にて、神の国を待ちのぞめり。⁵² 此の人ピラトの許にゆき、イエスの屍体を乞い、⁵³ これを取りおろし、亜麻布にて包み、⁵⁴ 巖に鑿りたる未だ人を葬りし事なき墓に納めたり。⁵⁵ この日は準備日なり、かつ安息日近づきぬ。⁵⁶ ガリラヤよりイエスと共に来りし女た



ち後に従い、その墓と屍体しかばねの納められたる様とを見、⁵⁶ 帰りて香料と香油とを備う。かくて誠命いましめにしたがいて、安息日を休みたり。

「一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。」(ルカ 23・51〜24・1)

ここまでは、いうならば肉の次元というか、我々の住んでいる次元の振る舞いなんです。アリマタヤのヨセフや女性たちも誠心誠意にイエスさまに誠を尽くしている姿です。そして、安息日だから香料を塗ることができない。安息日が終わったら、一番にお墓に行つて死体に油を塗つて慰めて差し上げようというふうに、どこまでも慕わしいイエス・キリスト、我々と一緒に歩んでくださったイエス・キリスト、人間としてのイエス・キリスト、先生としてのイエス・キリスト、しかし無惨にも十字架で殺され、その死体を私たちがあずかつて墓に葬つた。これに香油を塗つて、できる限りのことをして差し上げよう、花も備えようと、そういう閉ざされた思いの中に生きている。誠心誠意に。それが行つてみたら、墓は空っぽだった。

「何だろうか、これは!？」

ということとで、この女たちはうろたえたという姿があります。うろたえていたら、輝ける衣を着た二人の人が傍らに立っている。ますます恐れた。これは何ごとかと。そしたら、二人の者が

「なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」

と。非常に象徴的な言葉です。「死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」と。私たちの生きていますこの地上の世界は、「死にし者ども」の世界なんです。結局は、死というものによつて閉ざされている世界です。さつきから言いました、追憶の中に生きる世界なんです。命日ごとにお墓に行つて、その人を追憶し、花を捧げる。もう屍も何ありませんけれども、追憶の中に生き、そして、

「私たち生き残つた人間は立派に生きますから」

と言つて誓いをたてる。やがて私たちも死んでいくという、閉ざされた世界なんです。ところが、天使は

「どうして、その中にあなた方は留まるの? イエスさまはその中にいらつしやらないよ。別次元の生命の世界に生きておられる。その次元をこそイエスさまはあなた方にもたらしただけではないの? どうして目が覚めないの? 目を覚まさない! いつまでも第一のアダムの世界に留まつていてはダメ。第二のアダム、永遠の生命、霊体をもつて現れてくださったその世界こそが、神さまがあなた方一人ひとりに与えようとなさっている本ものの世界だ。あなた方は本ものに出会えない。この地上は、本ものに出会うための第一のステージにすぎない。第二のステージに進みなさい!」



と言ってくれているんです。

「朽つるもので播かれ、朽ちないものに甦る」

という。第一のアダムは死をもたらした。第二のアダムは生命をもたらした。これが神さまの御意だ。キリストは、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言われた。

「私は本当の道、神さまの道であり、人が生きる道であり、私たちが踏みしめて歩くその人生そのものである。そして、本ものだよ」

という。「本もの」というのは、見える所の奥に隠された永遠なるものである。

「本ものは朽ちゆかないものだ、人を活かす愛だよ。そして私は永遠の生命だ」

と。だから、「我は道なり、真理なり、生命なり」というのは貫いている一つの事態なんです。イエスさまの本質の一つの事態が「我は道なり、真理なり、生命なり」という言葉で表されている。これに我々が化せられ、これと一つにされる。そしてイエスさまと同じ姿に変わります。そのための十字架であり、聖霊のご内住です。聖霊がそれをしてくださる。

●新しい天命に生きる

ローマ書8章をみますと、

「この聖霊は我々の死すべき体を活かし給う」

と書いてある。

「我々は所詮、死ぬべき体だ。しかし、その死すべき体をなお活かし給う、なお甦らせ給う」

と、そういうことが言われています。私にとってはもうこの聖霊なる主さま、このお方が我々一人ひとりの中に「ご内住」くださる。それは私たちにはいかなる根拠もない。

「善人だから、これだけ努力したから」

とか我々の側には何の拠り所もない。一方的な主さまのご愛です。それによって万人が救われる。これがまた受けとりにくいんですね。本当に理性的に考えたら、なぜイスラエルであのように起こったことが、今の私にそんなに深い関わりがあるのか。何か「アーカイブ」とかいう番組があつて昔のものを呼び覚まして今、上映してくれているけれども、

「昔あったことがどうして今、私たちに関わりがあるのか。あれはイスラエルで昔起こったただの歴史的出来事なんですよ。それがどうして今の私たちに関わりがあるのか。仮に関わりがあるとしても、何十億という人間がいて、なぜ私なの？」というふうに思いますよね。それに対して私は申し上げたい。

「太陽をご覧なさい。天界の太陽を。太陽の光は、何十億年の昔から地球を照らし続けている。地球には何十億の人がいる。昔の人も今の人もみんな太陽の光を一



人ひとりが愛して生きてきた。今もそうだよ。戸外に出てごらん。雲間から太陽の光が射してきたら、暖まりを感じるでしょ。あの太陽が地球上の何十億という、過去から現代までの人たちを照らし、生命づけてきたんだよ。肉体の生命ですら、たった一つの、まるで永遠の実在者の如き太陽というこの存在によって生きてきたのではないか。ましてや、霊界の太陽であり給うキリスト・イエスさまは我々一人ひとりを活かさないはずがあるうか」

と、こう私は言いたい。正に自然界の太陽は、キリストのシンボルとして、キリストを指し示す誠に素晴らしいシンボルとして、今も永遠に照り続けてくれている。

「その暖まりを蒙らざるものなし」

と、詩篇にありますね。そのように、復活のキリスト、霊界のキリスト、永遠界のキリストが今、聖霊という姿で一人ひとりの中に宿り給う。「私なんか」と言う前に、

「あなたは私と一緒に十字架につけられた。もうあそこで一緒に、あそこで運命共同体になってしまった。あなたは気づかなかったかもしれないけれども、あなたの生まれる前から私はそうしたんだ。あなたの生命はあそこにあっただよ、実は。あなたの知らない時に、あそこでああやってあなたを愛して、あなたを贖った。よくぞ今、気がついてくれたね。さあ今、あなたの中に宿った。これであなたと本当に一つになれた。さあこれから一緒に生きるんだよ」

と。そういうキリスト族、キリストの子供、神の子、これをつくる働きをずっとキリストはしてなざる。そして、神の子になつたら、我々全員を天界へ招いてくださる。そして、この地上で働きを終った時は、御許に呼んでくださる。

「地上にある間は御意に従って働きなさい。私も御意に従って働いた。あなたも地上にある限りは、私の弟子として働きなさい。第二のアダムとして働くんだ。もうかつての第一のアダムではないよ」

これが私に与えられた新しい使命、天命なんです。50歳で気づかれた方も、20歳で気づいた方も、80歳で気づく方も、等しくその使命に生きる。あのマタイ伝20章に、

「朝の5時から働いた人、夕方の5時にやっと働きにありついた人、みんな等しく一デナリを与えた」

というお話がありますね。あのように、神さまの御意を地上にある間に気づいてほしい。気づいた瞬間に、

「あなたは生き返ったよ、あなたは甦った。あなたは放蕩息子だったけれども、死んでいた生命が、失われた生命が甦ったんだよ」

と言って、放蕩息子を抱きしめる親父のように、イエスさまは永遠に、いついかなる瞬間にも人に働きかけて、

「甦ってほしい。本当の生命に、第二のアダムの生命に生きてほしい」



と言つて、イエスキスは迫つておられる。これをしつかりと受けとるのが復活節なんです。本日この時間に、皆さん、絶対に受けとつてくださつたと、私は信じたい。

「いやあ、私はまだダメです」

なんて、何でダメですか。イエスさまの事実が先に先行、事実先行だよという。この事実が単なる事実ではなく、神さまの愛の行為、神さまの愛の御業みわざが先行しているんです。

「初めに言ありき」

ではなかった。

「初めに行為ありき」

という。十字架の愛の御業、これが成就した。そしてご復活という事実が成就した。それをもつて皆さんの中に入ろうとしておられる。我々は、

「はい、ありがとうございます！」

と。「はい」と言うこと、それだけです。ヨハネ伝の始めにありましたね。

『はい』と言う者には神の子となる権を与え給えり。人の血筋によらず、肉の願いによらず、ただ神においてのみ生まれたり」

とあります。そのごとく、聖書はどこを読みましてもつながっているんです。ヨハネ伝であろが、コリント書であろが、他の福音書であろが、ローマ書であろが、全部つながっていますから。それがいろんな角度から切り込んできてくれている。

「神はその独子^{ひとりご}を賜ったほどにこの世を愛してくださった。信ずる者の亡びずして、永遠^{とこしえ}の生命を得んがためなり」

と。「永遠の生命」とは何ですか。さつきから申してます、復活のキリストのあの栄光の姿に宿っている生命です。これを一人ひとりに与えんとして来てくださった。

そういうことで、皆さんの中にこの復活の主さまが聖霊となつて宿つてくださった。この十字架、ご復活、その事態を深く深く開示してくださったことを、開き示してください。たことを私は信じています。それでは、終りといえます。

●
祈り

主イエス・キリストさま、十字架にかかり、陰府よみに下り、墓を蹴破つて甦り給うた、栄光の本来の姿を現わし給うた、愛の主イエス・キリストさま。ありがとうございます。あなたは私たちをあなただの永遠の生命に化せしめんとて、我々の知らざる所にて、あなたはお生まれになり、生きてくださり、十字架を負ってください、そして甦ってください、聖霊となつて弟子たちにくんだり、今、私たちの中に受肉してくださいましたことを感謝いたします。

我々は日々十字架で葬られ、日々にあなたと共に甦っております。主さま、旧き我を葬り去つて、

「誰でもキリストにあるならば、新しく造られたものなり。旧きは過ぎ去った。



視よ、一切は新しくなりたり」

と、そのようにして私たちは日ごとに新しくあなたと共に歩んで参ります。
あなたの一方的な無条件のご愛を感謝いたします。等しく誰にも等しく、

「わが意^{こころ}なり」

と言って、あなたが聖霊を下さることを感謝いたします。

十字架で我々は碎かれ、あの碎かれたるあの罪びとの姿となって、

「汝、今日、我と共にパラダイス！」

という、主さまと一緒にパラダイスをいただいて、聖名を讃えつつ歩んで参ります。ありがとうございます。天界の小池先生、また、既に召されました兄弟姉妹たちと共に、また天の万軍と共に、あなたの御愛を深く感謝し、聖名を讃え奉ります。

今日ここに集われた一人ひとり、掛け替えのない一人ひとりでございます。主さま、どうぞ、あなたの奥義を示し、限りなくあなたの愛する子として、また僕として、聖名を持ち運ぶ器としてお使いください。

主イエス・キリストの聖名にあつて、この祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。

